

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2020 田辺明生

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



# 人新世時代の人間を問う 滅びゆく世界で生きるということ

2

総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース

田辺明生

# 1. 人新世において「世界」と「人間」の未来を考えるとということ

- ▶ 「人新世」(anthropocene)の概念は、人類の活動によって地球システムが新たな状態に移行しつつあることを示す。大気化学者のP.クルツツェンが完新世後を指す地質年代として提唱
- ▶ 「定常的な自然が一方にあり、個人の集合からなる社会が他方にある」というこれまでの前提はすでにこわれている。
- ▶ ところが、民主政治、市場経済、市民社会といった現在支配的な理念や制度は、こうした古い前提に立ったものである。
- ▶ これを刷新する新たな世界観・人間観が必要。

## 2. 映画『天気の子』

(新海誠監督、2019年7月19日公開)

- ▶ 異常気象により雨が続く東京
- ▶ テーマは、滅びゆく世界のなかでいかに生き抜くか

著作権等の都合により省略しました

映画「天気の子」の予告映像

東宝MOVIEチャンネル  
東宝株式会社

<https://www.youtube.com/watch?v=rzKcrJ77wBY>

# 地球システムに影響力をもってしまった 人新世の人間

- 世界をコントロールすることへの欲望、過剰な介入、その予期せざる結果。
- 地球温暖化、異常気象、海面上昇、地盤沈下、コロナ・パンデミックなど、世界は「不気味」な姿を現しはじめている。
- 「世界とつながっているという我々の幻想に隠された深淵」を認識する必要 (K.・イシグロの。ノーベル賞受賞理由)。
- 「天気の子」は雲の上の〈リアルな地球〉そして〈あの世〉に触れることによって、自己と世界のあいだの深淵をこえて、多・他なるものたちをつなげなおす可能性を探求する物語。

### 3. 人新世はいつから？

## 1950年代の「大加速」

- クルツツェンは、18世紀後半（蒸気機関の発明）を挙げた。
- 火の使用（170～20万年前から）、農耕開始（1万年前）などをあげる人もいる。
- 1950年代の「大加速」（Great Acceleration）への着目。人間活動の爆発的増大による自然環境の大変化の時期にあたる。

著作権等の都合により省略しました

## Socio-economic trendsグラフ

The Trajectory of the Anthropocene: The Great  
Acceleration

Will Steffen, Wendy Broadgate, Lisa Deutsch, et al  
SAGE Publications 2015

<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/2053019614564785#articlePermissionsContainer>



著作権等の都合により省略しました

## Socio-economic trendsグラフ

The Trajectory of the Anthropocene: The Great  
Acceleration

Will Steffen, Wendy Broadgate, Lisa Deutsch, et al  
SAGE Publications 2015

<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/2053019614564785#articlePermissionsContainer>

著作権等の都合により省略しました

## Earth system trendsグラフ

The Trajectory of the Anthropocene: The Great  
Acceleration

Will Steffen, Wendy Broadgate, Lisa Deutsch, et al  
SAGE Publications 2015

<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/2053019614564785#articlePermissionsContainer>

著作権等の都合により省略しました

## Earth system trendsグラフ

The Trajectory of the Anthropocene: The Great  
Acceleration

Will Steffen, Wendy Broadgate, Lisa Deutsch, et al  
SAGE Publications 2015

<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/2053019614564785#articlePermissionsContainer>

# 地球システムの危機をどう解決するか？

- クルツツェンはジオ・エンジニアリングを推す。炭素回収貯留による温暖化ガスの除去とか、成層圏エアロゾル注入による太陽放射管理とか、科学技術による気候の最適化。
- しかし、こうした科学による自然統御の発想こそが、人新世の時代を生んでしまったのではないか。
- 現代科学は予測不可能性も指摘していることに注意しなければならない。
- これまでの文明の基礎から問い直す必要がある。

# 「一つの世界」と「多の世界」

- 「一つの世界」（客体化された自然世界）だけが実際にあるのではなく、さまざまな存在者にとっての「多の世界」（意味を支える場としての環世界）がある。
- 「一つの世界」と「多の世界」のギャップをどのように媒介するか。
- わたしたちは「多の世界からなる一つの世界」(a world of many worlds)をどのように構築できるのか。

## 4. 画期としての1950-60年代から21世紀へ： ポストコロニアル、サイボーグ、マルチスピーシズ

- ➡ 1950-60年代の大変化
- ➡ 1) 非「西洋・白人・ブルジョワ・男性」の人びとの公共参加。
- ➡ 2) 生活様式の大変容（グリッド化）
- ➡ 3) 環境破壊

# 1) 非「西洋・白人・ブルジョワ・男性」 の人びとの参加

- ▶ 植民地独立、公民権運動、フェミニズム、労働運動などの動きのなかで、合理的主体の確立が進展していくという発展図式のゆらぎ。
- ▶ のちのポストコロニアル、ポストセキュラーの研究動向へ。

## 2) 生活様式の大変容（グリッド化）

- 日常生活が電気・ガス・水道に頼るようになる。グリッド（配電網、配管網）と接続した生活があたりまえに。
- 人間はつねに科学技術的な大規模ネットワークに接続せねば生きていけない存在となっていくた。
- →サイボーグとしての人間[ダナ・ハラウェイ]。  
人間は「機械と生体の複合体」

著作権等の都合により省略しました

書籍の表紙

Donna J. Haraway  
Simians, Cyborgs, and Women  
The Reinvention of Nature  
Routledge 2015



### 3) 環境破壊

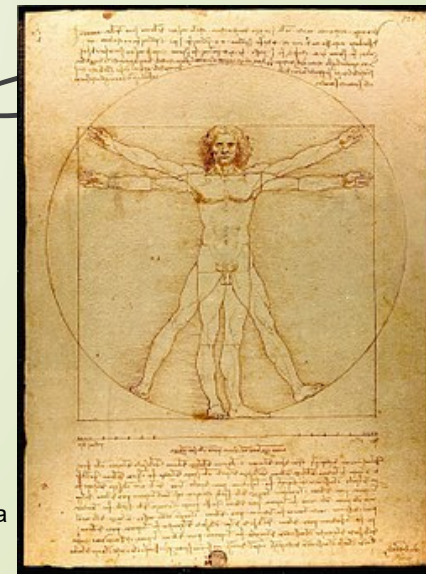
- 化学物質による公害。核実験。
- 「この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、たがいに力を及ぼしあいながら、生命の歴史を織りなしてきた。といっても、たいてい環境のほうが、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎない。だが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が、おそるべき力を手に入れて、自然を変えようとしている」レイチェル・カーソン『沈黙の春』(1962年)。
- → 自然と人間の関係の問いなおしから、存在論的転回(多文化主義から多自然主義へ)やマルチスピーシーズ人類学などへ。

カーソン レイチェル(著), 青樹 築一(訳)  
『沈黙の春』  
新潮文庫 1974年 p.14より

## 5. 人間とは？

- ▶ 人間とは、「人間のようなもの」である。（船曳建夫.  
「序 人間とは何か／人間のようなもの」船曳建夫編『岩波講座 文化人類学第1巻 新たな人間の発見』）
- ▶ つまり人間とは、人間が自分と同じようなものとして共感できる範囲にあるものたちである。
- ▶ 人類史上のなかで、この範囲はどんどんゆらぎ変化してきた。
- ▶ 人間とは「人間とは何か」を探求するものである。
- ▶ 「人間ならざるもの」(他者、霊、機械、他種など)とのからみあいのなかで「人間なるもの」が再定義されている時代。
- ▶ 人間と非人間の〈あいだ〉や〈つながり〉から生まれる人間と世界の新たな潜在的可能性。

船曳建夫他編  
『新たな人間の発見』  
岩波講座 文化人類学 第1巻 岩波書店 1997年より



# human co-becoming

- ▶ 生命体（そして非生命体）のすべてが、共進化し、共生生成する。
- ▶ 人間はhuman being というよりも、human becoming であり、さらにhuman co-becoming である。
- ▶ 人間・非人間の有機体のすべての生命体は、相互的に影響しあいながら、風土・景観・環境をつくり、また生理的感覚・情動をつくりだす。e.g. 腸内細菌と脳機能の関連。人間と野菜・穀物や家畜との関係。

## 6. human co-becoming の現代的可能性 個人性を解体し、他者とつながること

- 1) 資本主義におけるエートスと装置のずれ。世俗内禁欲というエートスは、資本主義が「自己推進的なマシン」となれば必要ない。装置とエートスのズレに希望はある。
- 2) 政治経済の装置は、主体と権利を外在的に定めようとする。一方、精神・心は、そもそもそうした資源の生産・分配・消費の動き自体が可能になる生命の「力＝存在」の動き全体を観じて、自らの「生のかたち」をつくりあげようとする。

# サイボーグ的・分人的なつながりのなかの human co-becoming

- ➡ 3) 現代世界におけるデータガバナンスの装置のなかで、個体は、一貫性をもった不可分の「個人」ではなく、さまざまなデータへと断片化された「分人」として現れる。個人が解体され分人となり、また人間と機械の境界がなくなっていくなかでも、human co-becomingは自らのエートスを構築することができる。
- ➡ 4) 形式的・数字的・アルゴリズム的なものに抑圧された、そこから解放されなければならない人間性があるというよりも、サイボーグ的・分人的なつながりのなかだからこそ、現代的なhuman co-becomingの可能性。

# 不確実性の想像力

- ➡ 5) 〈現実〉はプログラム化されたアルゴリズム（の装置）だけで決定されるものではない。現実には常に自他の出会いであり、その出会いには常に偶然性と非決定性が潜んでいる。その偶然性と非決定性こそが希望の源であり、不気味なるunthinkableと相対するわたしたちは新たな「不確実性の想像力」を磨かなくてはならない

## 現実のなかにある「異他の潜在性」

- 5) 装置のなかで生きながら、それによって定義されてしまうのではなく、サイボーグ的・分人的なつながりにおけるさまざまな触発し触発される力をつうじて、現実のなかにある「異他の潜在性」と触れ、常なる「始まり」(beginnings)を創造的に画していくことができるか。
- それは、自己自身を別のものへと生成変化する「霊性」や、また別のものを想像＝創造する「芸術」の営みとなるはずだ。

## おわりに： 滅びゆく世界のなかで人間として生きること

- 1) 宇宙と地球の歴史のなかで人間は一時的な存在でしかないという当然の認識の上に立つ。
- 2) 人間の発展・拡大という歴史観をこえて、人間が人間ならざるものと共に自らの生をつくってきたことを認識する。Human beings から human co-becomings へ。
- 3) どんな生命体も世界とは「部分的なつながり」しかもてない。さまざまな自己の多種多様な環世界がある。One-world world を超えて、A world of many worlds へ。



- 4) 環世界における自他のからみあいの〈現在〉のなかに、「異他性」の生成の契機が潜む襞が折りたたまれている。その襞に入り込み、unfoldし、またrefoldする可能性——つまり自己と世界の変容の可能性——を〈現実〉的に探求すること。
- 私たちに必要なのは、他者に関与し、変容していくこと。他者と共に内奥を分かち合いながら、共に変わっていくこと。
- 自己の内奥を他者に開くことから、その他者ととともに、世界の秘密（神即自然）に触れることが可能になっていく。そして世界の秘密に触れることによって、わたしたちは他者とともに変わっていくことができるのだ。
- 天気の子「これは、僕と彼女だけが知っている、世界の秘密についての物語」

- 5) そうした人間のhuman co-becomingsとしてのありかた——自己を他者と共に変容していくこと——は、いまある世界の〈外〉でありながら、〈現在〉の瞬間自身の裡にある、「永遠的な何か」に触れることによって可能となっていく。
- 他と共に、外に触れながら、自分自身とは別のものに生成変化していく探求、実践、経験を生きること。あるいはそうした別のものを想像・創造すること。
- 滅びゆくからこそ美しいこの世界のなかで、襞を開き、さまざまな花を咲かせること。